



遊佐町 鳥海湖

お花畑広がる山のオアシス 鳥海湖

 庄内銀行

Cradle 7 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2022 July/August
令和4年7月1日発行(隔月奇数月発行)第12巻6号(通巻72号)

発行：Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 株式会社 出羽庄内地域文化センター 電話0236(64)0888
制作：Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 コミュニティホール「ジョーン」 電話0234(41)0012

美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
酒井家
庄内入部400年②
庄内憧憬
本郷和人
歴史学者

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

7 2022 July/August
TAKE FREE
NO.72



徳川家の統治が落ち着きを見せた三代家光の頃、10万石を超える領地を与えられていた譜代大名は、酒井、本多、榊原、井伊の四家でした。

徳川四天王、酒井家

本郷和人

だいぶ前から今以て、「転生もの」とグループ分けされるコンテンツがはやっています。主人公が現代から異世界に転生するのですが、そのとき常人を超えた能力を授かり、異世界先で魔族と戦う。それでひととき強い魔族に会い、これをなんとか倒すと、あらたな二人の魔族が現れ、「ヤツは我々四天王の中でも最弱！」なんて負け惜しみを言うのがお約束です。

当然このセリフ、濫觴^{らんしょう}があるわけで、調べてみると、増田こうすけ先生というマンガ家の創作でした。それがエンタメ界で市民権を得た。でも、さらに考えてみると、私たちは四天王という言葉は何の気なしに口にしますが、これだって、たぶん昔からの言葉ではありません。四天王の代表である徳川四天王。具体的には、酒井、本多、榊原、井伊ですが、彼らはいつからそう呼ばれたのか。あるいは一グループにまとめられたのか。

新井白石に『藩翰譜』という書物があります。甲府藩主の徳川綱豊の命を受けて編纂した、諸大名337家の由来と事

績を集録し、系図をつけたもの。成立は元禄15（1702）年。第1巻が親藩（徳川諸家）、2と3は松平各家、4と6までが譜代大名、7と10が外様大名の巻になります。ここで、4巻上、譜代大名の先頭に書かれているのが先の四家。これなどは四家が一グループにまとめられた早いほうの資料ではないでしょうか。もちろん、四天王などという呼び方はされていません。四天王呼びはずっと後なのでしよう。

徳川家の統治が落ち着いたというところ、三代家光が將軍になった頃でしょうか。この当時に、10万石を超える領地を与えられていた譜代大名というと、まさにこの四家でした。それで不思議に思ったのです。譜代大名といえば、幕府の政治を動かす存在です。でも、この四家は、井伊こそ大老になりますが、これは内実のない名誉職であるし、実権が伴う老中や若年寄などにはならない。なぜかな？と思ってしまう一度『藩翰譜』に戻ると、白石は譜代大名を酒井以下の「武功の家」と「執事・御役の家」に分類し、武功の



「徳川十六将図」
左上が酒井家初代酒井忠次。致道博物館蔵。

家を先述している、つまり上位に置いていなのです。

ここから、ぼくは、ある仮説を立ててみました。戦争がなくなった中期以降はいざ知らず、家光將軍頃までは、明らかに軍事が上位、政治が下位であった。だから、徳川幕府は基本が軍事政権であった、政治に関わることも、要衝の地をしつかり治める方が大切。もし徳川將軍家を攻める動きが起きたらそれに対処する。戦をし、万が一となれば、城に籠もって時間をかせぐ。我が身を犠牲にして徳川主力軍の来援を待つ。それこそが

譜代大名に期待された働きだったのでないでしょうか。庄内を治める酒井左衛門尉家は、伊達・上杉・佐竹などの旧戦国大名家に睨みをきかせ、奥羽の中枢を守る、まさに譜代大名の第一だったのです。

※濫觴・ものごとの始まり、起源。

ほんごう・かずと／歴史学者。東京大学史料編纂所教授。1960年東京都生まれ。東京大学大学院単位取得退学。文学博士。専門は日本中世史、研究テーマは中世政治史。史料編纂所で『大日本史料』第5編の編纂を担当。著書に『武士から王へ』（筑摩書房）、「天皇はなぜ生き残ったか」（新潮社）、「武力による政治の誕生」（講談社）、「謎とき平清盛」（文藝春秋）など。テレビ番組への出演のほか、時代考証および監修も多数手がける。

酒井家 特集 庄内入部 400年 2

戊辰戦争に敗れ、賊軍といわれた旧庄内藩。
酒井家庄内入部400年記念特集、第2弾では
明治の近代国家成立の時代の中で酒井家がどこに向かって舵を切り、
何を支柱に、どのように庄内の地域づくりを進めていったのか、
その歩みをたどります。今も「殿が暮らすまち」の
はるかな400年を学び、これからの庄内の100年へと。

【企画協力】
酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

【取材協力、写真提供】
公益財団法人致道博物館、鶴岡市郷土資料館
酒田市教育委員会、酒田市立資料館
JA全農山形、荘内松柏会、酒井 潤

【参考資料】
加藤省一郎著『臥牛 菅実秀』致道博物館 昭和41年(1966)
『鶴岡市史 中巻』『鶴岡市史 下巻』鶴岡市 昭和50年(1975)
『本願 第1号』丕願会 昭和56年(1981)
坂本守正著『庄内人物史考2 酒井玄著の明治』庄内人物史研究会 昭和57年(1982)
荘内松柏会著・刊『荘内松柏会五十年のあゆみ』平成元年(1989)
『敬天叢書第22号 酒井忠治氏講話 藩校致道館廃校後の庄内の教学』長谷川信夫 平成7年(1995)
犬塚又太郎著『関雉 犬塚又太郎先生遺稿集』同刊行会 平成8年(1996)
武山省三編・著『凌霜史』松ヶ岡開墾場 平成9年(1997)
高橋義順著『山居倉庫と庄内米』庄内倉庫株式会社 平成9年(1997)
鶴岡市史編纂会編『図説 鶴岡のあゆみ』鶴岡市 平成23年(2011)
『松ヶ岡かいこん物語り』鶴岡まちづくり塾羽黒グループ 平成26年(2014)
『新編 庄内史年表』鶴岡市 平成28年(2016)
『山居倉庫文化財調査報告書』酒田市教育委員会 令和2年(2020)
酒田市立資料館 第220回企画展『山居倉庫は日本一!! 米郡酒田を支えた米券倉庫』解説資料 令和3年(2021)

致道博物館御隠殿内の「關雉堂(かんしやうどう)」
明治政府の太政官、外務卿などを歴任した副島種臣は、明治24
(1891)年ここで中国古典『詩経』から「關雉」を講義したことが
「關雉堂」命名の由来。今も副島が残した扁額が飾られている。



特集
酒井家
庄内入部
400年②

志を胸に海を渡った 酒井忠篤、忠宝、玄蕃

ただずみ

ただみち

げんば

戊辰戦争に敗北した庄内藩は、賊軍の汚名をそそがんと報国の志を抱き歩みを進めます。酒井忠篤は兵学、忠宝は法学を修め、ドイツに留学、そして酒井玄蕃は外交進展の使命を帯び、清国へ渡りました。

戊辰戦争で最後に降伏した庄内藩。その処分は極めて寛大でした。13代酒井忠篤は東京での謹慎処分が解かれると、その措置は西郷隆盛によるものと知り、明治3（1870）年11月、旧庄内藩士ら70余人を連れ、鹿児島を訪れます。鉄砲をかついで激しい訓練に励む姿は旧薩摩藩士を驚かせました。4カ月ほどの訓練を経て帰京すると、4年8月兵部省7等に出仕、その後宮内省に出仕し、明治天皇のお相手を務めます。5年2月には陸軍少佐に任じられました。

ある日、西郷の意を受けた黒田清隆に、「欧州に留学し艱難を凌ぎ皇国の柱石となる素質を養わん御心はないか」と問われ、忠篤は熟考の末、応諾しました。洋行の前に4年ぶりに帰郷した忠篤は、松ヶ岡開墾に先立ち荒地の開拓に従事する旧藩士に

篤にも書状を送り伝えました。

7年10月、玄蕃は清国に渡ります。当時日本は内務卿の大久保利通が北京に入り、清国と交渉するも難航。玄蕃は北海道開拓長官となっていた黒田清隆の密使として「清国の国情、軍事力などの実態探索」の特別任務を担いました。天津から北京、さらに上海から長江を遡航し漢口まで入り、目にする軍事施設などから探索を遂行。帰国するとその日のうちに黒田長官に「北清視察戦略」を提出。「戦ふの難きに非ず、戦いに至るの難きなり」と10項目の困難を挙げて冷静な判断を示します。この報告書は後に、戊辰戦争での経験や修養が培った戦略眼による卓見と評価されますが、当時は生かされませんでした。生かされていたらその後の歴史は変わったのでは、といわれます。そ

留学の目的を伝えます。鶴岡市郷土資料館の今野章さんは、「降伏による賊軍の汚名をそそごうとする旧藩士には、前途を嘱望され、欧州留学に旅立つ忠篤の存在は誇らしく、開墾の大きな励みだったでしょう」と話します。5年4月、忠篤は兵学を、そして家督を継いだ14代忠宝も翌6年に法学修業のため、同じくドイツに渡りました。

戊辰戦争で二番大隊長として活躍し「鬼玄蕃」と恐れられた中老酒井玄蕃は、4年9月に忠篤と同じ兵部省7等に出仕しますが、病のため5カ月で辞します。その後6年秋、西郷が「遣韓論」で下野する政変が起きると、酒田県幹部は7年1月玄蕃を西郷のいる鹿児島に派遣します。西郷と会見した玄蕃は、西郷の真意を県幹部に報告し、ドイツにいる忠

の後、病が再発した玄蕃は9年2月、

33歳でその壮烈な生涯を閉じました。翌年、西郷が西南戦争に敗れ没すると、政府の庄内に対する姿勢は大きく変化します。12年、ドイツ留学から帰国した忠篤と忠宝に、政府での活躍の場なく、14年、2人は鶴岡に帰りました。この間の事情については、「南洲翁すでに没して、廟堂（政府）の形勢一変し、報国の志を伸ぶるに由なく軍職を辞せり」と書き残されています。ドイツに長年留学し、日夜勉学に励んだ2人。兵学、法学の西洋の最新知識を身に付け、中央政府での大いなる活躍を期待された2人にとって、また庄内にとっただったでしょう。以後2人は地元庄内の産業・文化振興に意を注ぐことになり。

Column ひちりき
酒井玄蕃愛用の筆策
(個人所蔵)



酒井玄蕃は、常に情勢を冷静に分析し明確な戦略を練り戦う一方、書、詩、笛を愛する一面も持つ逸材だった。家族あての遺言書では、「門閥の觀念を捨て、新時代の平等な市民の一人たる自覚を持つこと」、「農家の業に従事し独立の計を立てよ」など、これからの世を見通した見識を示している。



酒井忠篤所用地球儀。ドイツ留学中に購入したと伝わる。明治6年7月玄蕃に宛てた書簡ではドイツ語会話もかなり上達し、地理の次に歴史に入り、目的の兵学に進もうとしている旨を報じている。致道博物館蔵



酒井忠宝所用洋書。留学中に購入したゲーテ全集[15巻]。1874年シュトゥットガルトとある。法学を学んだが文学にも勤しんだことが分かる。致道博物館蔵



酒井玄蕃。大山格之助と会談した明治5年4月前後の撮影と推定される。戊辰戦争を戦った大山は「かの鬼玄蕃とはこの美少年か」と驚いたという。



ドイツ留学中の酒井忠宝。戊辰戦争降伏後、兄忠篤に代わり14代として家督を継ぐ。絵画に才があった。



ドイツ留学前の酒井忠篤。明治4（1871）年、19歳。東京で撮影。幕末に10歳で家督を継ぐ。戊辰戦争後、家督を弟忠宝に譲るも、13年再相続し15代を継承。能書家。



特集
酒井家
庄内入部
400年^②

徳義を本とし事業を経営して 天下に模範たらんとす

※「山居倉庫綱領」より

「徳義を本として産業を興して国家に報じ以て天下に模範たらんとす」これは戊辰戦争後、旧庄内藩士が地域の殖産のため蚕業に励んだ松ヶ岡開墾場綱領の一節です。この酒井家の藩政の信条は、後に米作りへと受け継がれました。

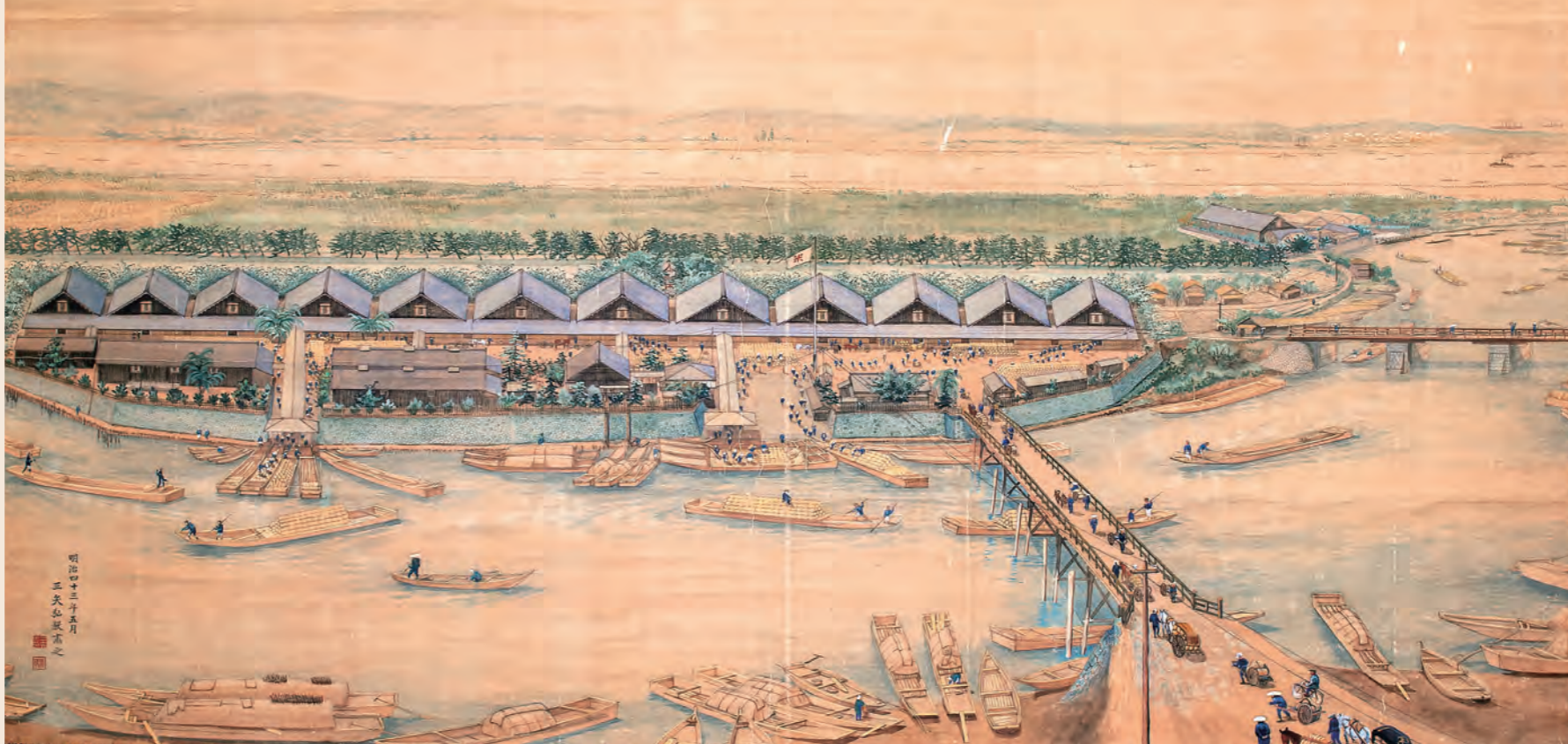
「庄内は天恵の沃野、正に之を以て国を立つべき楽土なり」酒井家3代、庄内藩祖忠勝は、入部に伴い庄内の風土に農の地としての豊かさを見出し、新田開発、水利事業、米蔵の設置など「庄内米」の基盤を築きました。入部から翌々年の寛永元（1624）年には「米札」を発行。これ



入庫米の審査は、専門の知識を持つ検査員らによって行われ、一度俵装を解くなどして等級別に品質の均一化を図ったという。大正14年頃。資料提供=酒田市教育委員会

はいわば手形のごとで、藩士への俸禄（給与）として支給され、その一部を蔵米と交換することで藩士家族の飯米としました。それ以外の米は、米商人を介して大坂などに移送されました。藩の財源でもある年貢米は厳格に品質管理され、米商人らの間で庄内藩の米札は高い信用を得て、領内だけでなく西廻り航路の軌道にも乗り、「庄内米」はその名を広く知られるようになりました。

「米札」という先駆的な流通システムで名声を高めた庄内米でしたが、明治時代に年貢米から金納へと税制が変わると、粗悪米が出荷されるなど、市場評価は失墜します。状況を憂えた米商人たちは商会所の設立を本間家に懇願。6代光美は酒井家に経営を進言し、明治19（1886）年、酒井家全額出資による株式会社



等級別俵装（大正時代）。「黒縄の山居米」は最高級品として流通。米質によって縄のかけ方が異なり、黒縄1本が一等米。資料提供=酒田市教育委員会



戊辰戦争後、庄内藩士らは刀を鋤に替えて不毛の地から蚕業を興した。150年の歴史を有する松ヶ岡開墾場。

三矢弘毅画「明治四十三年当時之山居倉庫実景」(JA全農山形蔵)。米俵を積んだ川舟が行きかい、荷上場から米を運び込む人の往来で賑わう。

酒田米商会所が発足しました。その事業を任せられた旧庄内藩中老の菅実秀は「庄内を理想の郷土にするためには産業振興が何としても必要であり、そのためには米を無視することはできない」とし、旧士族や子弟の教育も目的とした経営にあたりま

Column 国指定史跡 山居倉庫



現役の農業倉庫として活用されている山居倉庫。二重屋根で空気を通して熱をためず、にがり練りを練りこみ塩を敷いた土間で吸湿するという環境で米の品質を保った。並木の美しいケヤキも西日を防ぐために植えられたもの。今に生きる建築の機能美が庄内米ブランドを支えた。令和3年、国史跡に指定。

した（高橋義順著『山居倉庫と庄内米』）。その後、政府が米取引の新法を發布したのを機に商会所は「酒田米穀取引所」と改組、新倉庫の建設に取りかかります。建設地はかつて「山居島」といわれた港に近く舟運に適した場所。しかし軟弱な地盤だったため、盛り土をし、石垣をめぐらせ、倉の基礎には3・6メートルもの丸太を杭打つ大規模な工事が進められました。そうして明治26年11月、米穀取引所の附属倉庫として、山居倉庫は開業しました。山居倉庫は産米の改良を目指して、入庫から保管管理まで類を見ない厳正な基準が敷かれ、また農民らも乾

田馬耕などの技術を導入して、良質米の生産と収量の獲得に努めました。加藤省一郎著『臥牛菅実秀』によると菅は「米の取り扱いは神に祈誓する心をもってせよ」と職員らを指導したといえます。高品質な米蔵として声価を高めた山居倉庫は、日本経済への影響力を持つまでになり、大正4（1915）年には日本銀行の指定倉庫となりました。こうして庄内米ブランドの礎を築いた山居倉庫は、昭和14（1939）年に「財団法人北斗会」に移管。現在はJA全農山形が所有し、現役の農業倉庫として、また観光施設として、米どころ庄内のシンボルとなっています。



特集
酒井家
庄内入部
400年^②

藩校致道館の教学精神を 新たな時代に引き継いで

戊辰戦争の降伏と酒井忠篤、忠宝の帰郷を経て、酒井家と旧庄内藩士によって進められた庄内の産業振興。一方で、酒井家を中心とした人々は藩校致道館からの教学精神を守り、学び続けました。

明治5（1872）年に明治政府から学制が公布され、廃校となった全国の藩校。庄内でも6年に致道館が廃校となりますが、旧藩士たちは先生の自宅などで学び合いを続けました。致道博物館学芸部長の本間豊さんは「庄内の人々が学び合いを続



昭和11年発足の庄内松柏会は現在も鶴岡市家中新町の松柏会館を拠点に活動が続けられている。写真は昭和40年2月に松柏会館で開催された第6回松柏・耕心講座。

けられたのは、徂徠学を中心とした致道館の教育によって、自発的に学ぶ姿勢が根づいていたからだと思えます。ちょうどその頃に始まった松ヶ岡の開墾士たちも開墾を終えてから鶴岡に戻って勉強会に参加していたそうなので、当時の人々の勉強への熱心さがうかがえます」と語ります。

酒井忠治講話記録「藩校致道館廃校後の庄内の教学」によると「お寄合」と呼ばれた勉強会は、孟子や中庸、大学など經典ごとに日にちを変えて数多く開催され、人々は自分で会を選択して参加。明治14年に酒井忠篤が帰郷してからは酒井家邸内の蚕室なども会場となり、年2回は会合同の磯釣り会をするなど心身を鍛錬する催しもあったといえます。また学問の内容は、菅実秀が西郷隆盛

から教わった「およそ学問は堯舜を本とし、孔子を教師とせよ」をもとに、次第に庄内独自のものに発展。明治24年に明治政府の副島種臣が鶴岡を訪れた時には、副島から「庄内はもはや徂徠学ではなく庄内学だ」と言われるまでになります。

その後、それぞれに勉強会を開いていると派閥争いや分裂につながることを考えた菅の発案で、酒井家邸内の蚕室に学問所「文会堂」を開設し、文会堂を主会場にした学び合いが続きました。そして酒井忠勝公入国300年記念式が開催された大正10

（1921）年には「少年会」を発足。14歳から20歳までの青少年が「南洲翁遺訓」や論語を学び、海浜学校などに参加しました。この会は昭和30年代に一旦途絶えたものの「少年少女古典素読教室」として復活し、続けられています。

さらにこの教学の姿勢は農業分野にも広がりました。昭和11（1936）年、安岡正篤創設の日本農士学校の教えを汲んだ「庄内松柏会」が設立。酒井忠篤の四男・忠悌を創設者の一人としたこの会は、「右手に論語、左手に鋤」を合言葉に、庄内学を軸に農業技術の向上を追究。人間教育と実学を共に学ぶ姿勢は、戦後松ヶ岡に菅原兵治によって創立された東北農家研究所（後の東北振興研修所）にもつながりました。

こうして致道館の教学を源泉に庄内学を構築し、学び続けた人々。この独自の教学精神は明治、大正、昭和を通し庄内の産業振興や文化継承を支える精神的支柱となり、太平洋戦争後「以文会」という新たな形に受け継がれていくこととなります。



大正時代、酒井家邸内の学問所「文会堂」に集まり、学び合う青年たち。会場奥に「文会堂」の扁額が掲げられている。

明治24（1891）年、關雎堂（現在の致道博物館御隠殿内）で行われた副島種臣による詩経の講義の様子。正面に座っているのは左から副島、酒井忠篤、忠宝。中根竜溪著「夢幻録」（致道博物館蔵）より。



今から100年前の大正10（1921）年4月、酒井忠勝公入国300年記念式と記念展覧会が開催された。酒井家16代忠良があいさつしている。会場は西田川郡郡会議事堂（後の鶴岡市公会堂）。

Column 少年少女 古典素読教室



大正10（1921）年に文会堂で発足した「少年会」の流れを汲む小・中学生向けの素読教室。昭和43（1968）年度に始まり、現在は致道博物館、致道館文化振興会議、市中央公民館の共催で市内の小・中学生を対象に、6月から7月にかけて開催している。



特集
酒井家
庄内入部
400年②

郷土をよりうるわしくして 次世代に託すために

文会堂によってつながれてきた教学精神と伝統文化は、
終戦後、以文会から致道博物館へ。
「庄内のためになることを」という酒井家の精神は、
形を変えながら受け継がれています。

昭和27年には、博物館の支柱を「郷土をよりうるわしくして次世代に託す」「正しい歴史伝統を探究する」「庄内の民衆が生み出した生活の美を探究する」の3本に。その支柱に則って、庄内の遺跡の発掘調査や民



酒井家18代忠久さんと、奥様の天美さん、長男で副館長の忠順さんを囲む致道博物館の皆さん。致道博物館の旧西田川郡役所前にて。

太平洋戦争が終結し、庄内にも民主化の波が訪れた頃、16代当主酒井忠良は百間堀(ひゃくまほり)一帯の所有地を鶴岡市に寄付します。昭和23(1948)年には文会堂として使われてきた酒井家蚕室を松ヶ岡に移築。後に致道博物館となる財団法人「以文会」を昭和25年に立ち上げ、酒井家御隠殿と藩校致道館の資料などを寄付しました。現致道博物館長で18代当主の酒井忠久さんは話します。「以前、初代館長の犬塚又太郎さんから『以文会を設立したのは、戦後、我々が先人たちの代からつなげてきた致道館の教学精神や伝統がなくなるおそれがあったから』と聞きました。設立は博物館が目的ではなく、それらを守り、後世に伝えることが第一義だったのです」。

本格的に博物館事業に乗り出した



朝日村田麦俣(現鶴岡市)に文政5(1822)年に建てられた多層民家を、昭和40(1965)年に致道博物館内へ移築保存した。



酒井天美さん主宰の「ギャラリーまつ」は、昭和59年から平成24年までに500ほどの企画展を開催。写真は平成7年11月開催の酒井忠明写真展の様子。

具収集、歴史的建造物の移築復元などが実施されました。「大名由来の美術館や博物館は代々の家宝を展示することが多いので、当館はかなりめずらしい博物館になっています。これも創設者の酒井忠良が庄内に生き、庄内学を学び続けた方だからだと思います」と主任学芸員の佐藤淳さん。「17代の父・忠明も常に庄内のことを考えていました。山居倉庫の事業が難しい局面になった時も、地域に必要なものはどんなに苦しくても地域のためにやり通さないとけないと、

尽力していました。最終的に農業団体に譲渡したことは、父でなければ収めきれなかったと言われています。そう話す忠久さんも、昭和56年、酒井家ゆかりの9つの事業体の再連携を目的に、社団法人不顕会(ひげん)を設立。松ヶ岡開墾場の歴史を顕彰・普及するための「松ヶ岡開墾記念館」と、休憩施設「一翠苑」「ギャラリーまつ」を開設し、奥様の天美さんと二人三脚で開墾場を発信する活動を行いました。天美さんは話します。「当初は地域外の人が松ヶ岡で事業をすることは初めてで苦労もありましたが、地元の方たちからとても協力的に、支えていただきました。池田満寿夫(みちみず)さんや下重暁子(あきこ)さんをはじめ多くの芸術家・作家の方々も松ヶ岡を大事にしてください。松ヶ岡での30年は私たちの宝物です」

Column
酒井家庄内入部
400年記念特別展



致道博物館では入部400年を記念し、酒井家伝来品の展示を中心に、庄内の歴史と文化を紹介中。現在は「中興の祖・酒井忠徳と庄内藩校致道館」を開催(7/18まで)。今後の予定は次の通り。
「民衆のチカラ—三方領知替え阻止運動」(7/22~9/7)
「藩祖・酒井忠勝」(9/10~10/31)
「酒井家の明治維新 戊辰戦争と松ヶ岡開墾」(11/3~12/25)

現在、次期19代目となる酒井忠順さんは、庄内酒井歴史文化振興会を発足し、酒井家墓所の保存管理に取り組んでいます。また6月にはWEBによる地域の情報発信事業を開始しました。酒井忠勝が庄内に入部して400年。酒井忠篤と忠宝が鶴岡に戻り、地域の文化・産業振興を始めて140年。「殿が暮らすまち」は、地域と共にこれからもこの地に脈々と続いていきます。



17代当主酒井忠明さんが昭和53年に出版した写真集『むらりの四季』と『出羽国庄内 農の風景』(共に絶版)。忠明さんは失われゆく庄内の農村の姿を熱心に写真に収めた。



田村牛乳の アイスクリーム

地域に愛されて91年
甘さ控えめでさっぱりと
田村牛乳のやさしい味わいを
さまざまに楽しめる
フレーバーが続々登場!

庄内平野の肥沃な大地で育まれる乳牛。その生乳100%の田村牛乳は、長年にわたり庄内各地の小中学校の給食で子どもたちの成長を支え、牛乳嫌いの子どもからも「田村牛乳だから飲める」と親しまれてきた。その地域に愛されてきた味が、近年アイスクリームとなった。

きっかけは、代表取締役の田村耕永こうえいさんが先代から遺された「何か新しい事業を始めるように」との言葉を受け、自社牛乳でチーズを作り、令和2年2月に販売を始めたこと。その製造過程で大量に出るホエイの有効活用としてホエイシャーベットに行き着いた。合わせて田村牛乳の味をそのまま生かしたミルクアイスも開発し、同年4月に販売開始すると大好評を博した。その後も酒田醸造の専用甘酒を使ったミルクアイス、コーヒー牛乳アイスを立て続けに販売。この7月には村山市の食用バラを使ったアイスも販売予定だという。

そもそも今回の商品開発の根底には、コロナ禍で行き場を失った1万4千トンもの牛乳が、周囲への呼びかけで2日で完売したことに対する「地域への恩返し」があるという。その策が庄内・山形の「売れる特産品」を作り、地域に還元すること。ロゴマークを目印に、お菓子やグッズを展開するのも、知名度を全国区に広めるためだという。「昭和6年に創業し、同業者がどんどん減る中でも弊社は生き残ってきました。だからこそどんなことがあっても乗り越えられるし、挑戦する姿を示すのが老舗の役目です」と話す田村さん。ちなみに40年前に生まれたマークの子はまだ名なしだという。ギブミー・ア・ネーム。



株式会社田村牛乳の商品は、牛乳、モッツアレラチーズ、アイスクリーム、ラングドシャ、サンドフィナンシェの他、オリジナルTシャツ、トートバッグ、文房具など。庄内ではト一屋各店、主婦の店各店、物産店、産直などで取り扱い。ヴィレッジヴァンガードとのコラボグッズはイオンモール三川店・天童店で販売中。

「田村牛乳」公式ホームページ
<https://www.tamura-milk.com/>
☎0234-22-1414 (9:00~16:00/土日定休)

(取材・文 長谷川結)



鳥海山

夏兆す 眺海の森を歩く

庄内平野の田植えが終わると日に日に一面水鏡から早苗田、青田へと変わっていく。水田の海を望むべく眺海の森へ向かった。

季語
夏兆す
(なつきさす)
春の花が終わり、自然や人の装いなどに、夏の兆しが見えてくる様子。

酒田市松山地区の外山山頂に広がる眺海の森は、庄内平野と最上川、日本海を一望できる場所として知られる。キャンプ場やスキー場、ピクニックランドや森林学習展示館、天体観測館などを有し、県民の森の一つとしても親しまれてきた。庄内平野が一面水鏡になる頃、水田に転がる夕日が日本海に沈み、残照の朱色に染まる最上川はこれまでも何度か見たが、朝日のまぶしい時間に訪れたのは初めてだった。

早苗田の庄内平野ひかり展へ
―あへ小萩
国道345号から出羽松山城址に入ると、洞瀧山總光寺のきのこ杉の参道に藤の花が降り注いでいる。躑躅が連なる山道を背に眺海の森の展望台へと上がった。眼下一望はるばるときらめく庄内平野、その彼方に飛鳥の影を浮かべた日本海、その中を悠々と最上川が横たわる。遠くに月山、金峯、母狩の山々まで連なっ



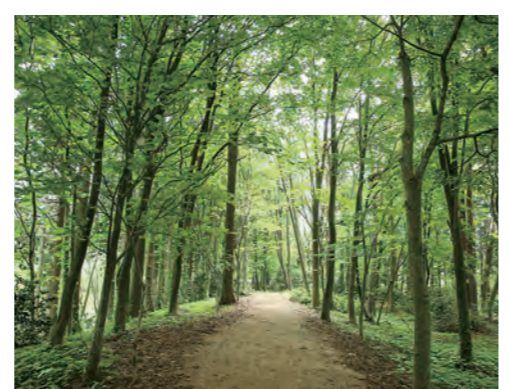
庄内平野と最上川

いた。夕景とはまた違う趣であった。

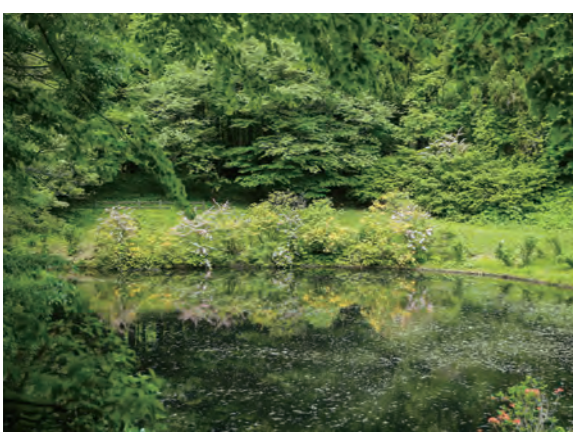
朴の花越しに光りて最上川
―稲畑汀子
ひょうたん池の辺りには、花時の空木が水面を彩る。立夏を過ぎると、森の植物は太陽の光を浴びて日に日に生い茂っていく。森は歩きたびに違った顔を見せて、いつもと違う時間、いつもと違う季節に歩くと、見えるものは変わる。

夏はじめ五臓六腑を水平に
―宇多喜代子
穏やかな時間の中、鴨の賑やかな声の方へ歩むと、指呼の間には朝日を浴びて薄紅色に染まる鳥海山。逆光に出羽山系の山並みを望んだ。
遊歩道を歩くと、山藤や桐の花のような紫色から、朴の花やエゴの花のような白い花が目にとまる。木漏れ日の中、足元には花期を過ぎた延齢草が群生し、毛虫たちが賑わいを見せていた。森に入ると、一人静の葉は艶めき、譲葉の若芽は色を濃くしている。あちこちで蝮草が今にも動き出しそうであった。

朝日から夕日へと空が暝色を帯びる前に、再び眺海の森を訪ねた。小高い丘に立ち、旧松山町生まれの哲学者『三太郎の日記』の阿部次郎の文学碑に面する。
豊かさは道の向こうに夏の森
―岩野綾子
「まさに海に入らうとする最上河とその周囲に発達せる平野は、鳥海山や月山や中央山脈の山塊を盟友として、幼い私の魂をその懐の中に育ててくれたのである」
(阿部次郎「最上河」より)



眺海の森の散歩道



ひょうたん池と空木



一人静の花のあと

鳥海山と庄内平野、最上川。眺海の森からこの景を目の当たりにすると、庄内の風土がここに暮らすものの魂を育んでいると実感する。

写真・文||あへ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)